

位置と環境

川内川を北西方向に望む標高約100mのなだらかな台地上にあり、鶴田町役場の南方約500mの所に位置している。遺跡の周辺は畑地となっているが、昭和31年頃は桑畑であり、墳丘は現在よりももっと大きかったと伝えられている。

調査の経緯

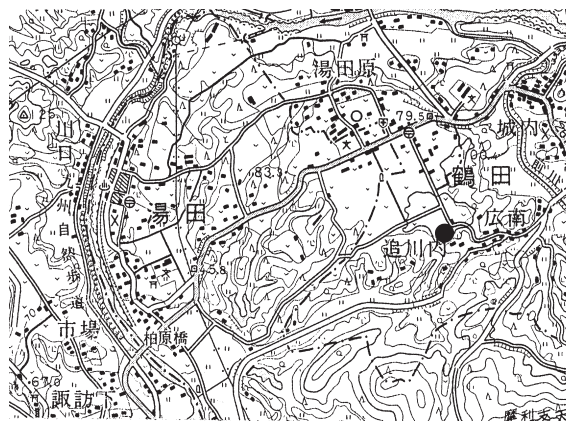
昭和31年頃、原口正三（当時、京都大学研究生）が、川内川流域の唯一の円墳と指摘し、注目されてきた。鶴田町は町史編纂事業の一環として調査を企画し、上村俊雄（調査責任者）、中間研志、本田道輝、旭慶男、多々良友博、鹿児島大学考古学研究会、宮之城農業高校、鶴田中学校郷土史クラブ等によって、1978（昭和53）年1月5日～9日まで調査が行われた。

遺構と遺物

墳丘の大きさは南北4.2m、東西5m、高さ1mであるが、以前はもっと大きかったという。内部構造は板石積石室墓であり、板石積石室墓は地下にあるという通念をくつがえすこととなった。葺石は小片も含め数10枚の板石を2・3段に重ねている。石室の径は東西235cm、南北249cmあり、最大級のものである。石室は22個の側石で円形石室を構成している。石室直上より、長さ103cmの直刀、長さ23cmの剣、柳葉式、椿葉式、斧箭式などの鉄鏃20数本が出土しているが、うち鉄鏃11本は束ねられた状態で出土している。石室内部からは人骨は出土しなかったが、石室上に副葬されていた直刀と剣に成人の下顎骨片と鎖骨片がそれぞれ付着していたのが注目される。石室内部から土器片が出土しているが、器形の判別ができないほど小片であった。側石が4個抜き取られている状況から盗掘されていると思われる。

特徴

川内川中流域にある唯一の円墳として早くからその存在が注目されていた。墳丘は周辺よりやや小高くなった地形を利用して築造されている。封土を有し、地表上に板石積石室墓を構築する築造法ははじ



第1図 湯田原古墳の位置

めての発見例であり、類例がない。副葬品からみて5世紀代のものであろう。この地域を支配した豪族が中央から波及した畿内型高塚古墳文化を受入れ、隼人の墓制の一つである地下式板石積石室墓文化と融合して生まれたものであろう。



写真1 湯田原古墳

資料の所在

出土遺物は、鶴田町教育委員会に保管されている。

参考文献

上村俊雄1979「湯田原古墳」『鶴田町誌』

(上村 俊雄)